

量子の世界は身近な存在に

【東京支社】ドイツの物理学者・ハイゼンベルクが量子力学の形式的体系である「行列力学」を発表してから100年。国連は今年を「国際量子科学技術年」と定めている。これを記念し、14、15の両日、東京都江東区の日本科学未来館でイベント「量子フェス」があった。実行委員長を務めた、山本貴博・東京理科大学教授（大分市出身）に、寄せる思いを聞いた。



山本貴博・実行委員長

物質のもとになる原子や分子などの動き、振る舞いを説明する量子力学。現代社会に欠かせないパソコンやスマートフォン、発光ダイオード（LED）などの技術開発は、すべてに量子の性質が応用されている。

「1000年かけて、科学者

東京都で「量子フェス」 山本貴博実行委員長に聞く

ば、これまでの社会や産業の常識は根底から覆る。量子力学を使ってどんな未来をつくっていくのか。それをみんなで一緒に考えよう」というのが、今回フェスを開いた目的

フェスでは「あなたのスマホにも量子がいる？ 日常にひそむ量子の世界」「宇宙最強のコンピューター、量子コンピューターを創ろう」などのテーマで、国内を代表する研究者が講演。また、作曲家が物理学者とともに量子の世界観を表現した交響曲も披露されるなど、ユニークな試みが注目された。

山本教授は、9月に大分市で開催される「サイエンスフェス in 大分」（大分合同新聞社主催）の総合プロデュー

「憧れる科学の世界見せたい」

サー。今年で7回目を迎え、子供たちに科学の楽しさを伝えるイベントとして定着しつつある。今回は量子フェスで講演した研究者も来場を予定している。



日本科学未来館では、量子に関連する新展示を公開している。「量子コンピュータ・ディスコ」（上）は、量子コンピューターに関連するトピックを幅広く扱う。「未読の未来」（下）では、実際の観測データをもとに製作された大迫力の映像を展示し、粒子と波動で宇宙を「みる」「きく」「つかまえる」「つくる」四つの研究に触れることができる（日本科学未来館提供）



「最近では理系人材が足りないという声を聞く。私たちが子供のころは、科学の世界に憧れを抱いていた。鉄腕アトムやドラえもんなど、科学のイメージを膨らませる漫画やアニメもあった。もう一度、子供たちが憧れる科学の世界を見ることが私たち大人の役割だと思っている。大分で会いましょう！」

（逆瀬川由夏）